

リハビリテーションの現状と未来

高橋 修[†]第77回国立病院総合医学会
2023年10月20日 於 広島

IRYO Vol. 78 No. 5 (312-317) 2024

要旨

今まで、筋ジストロフィーにおけるリハビリテーションの歴史は各種デバイスの導入により発展してきた。

1980年代の非侵襲的陽圧換気療法（NPPV）の登場や2000年以降の急速なインターネット環境の普及やアシスト型を含む電動車椅子の種類増加、スイッチデバイスの多様化により、患者の療養および生活環境が大きく改善した。

国立病院機構新潟病院は、前身の国立新潟療養所であった1968年（昭和43年）に、筋ジストロフィー病棟を開棟し、リハビリテーション科スタッフが筋ジストロフィー患者に対して積極的にリハビリテーション介入を行ってきた。現在は医療型障害児入所および療養介護契約入院として2つの病棟に97名が入院しており、その内53名が筋ジストロフィー患者である。

筋ジストロフィーではNPPVにより呼吸不全が改善したことで活動が可能になり、NPPVを電動車椅子に搭載し、患者ごとに電動車椅子操作スイッチの工夫を行い、インターネット環境の整備をとまなうことで生活の質（QOL）が著しく向上した。

リハビリテーション科では2013年よりロボットスーツHAL[®]（HAL[®]はCYBERDYNE社の登録商標）でのリハビリテーションを展開している。筋ジストロフィーなど神経筋8疾患に対して2016年に保険適用され、3週間程度の短期集中でHAL歩行運動療法を行う「HAL入院」も新潟県内外からの患者が増えている。

当科のHAL実施では保険適用疾患の中でデュシェンヌ型筋ジストロフィーの件数は少ない。その理由は、HAL医療用下肢タイプのSサイズの適応となる身長150 cm以上では、疾患の進行に伴い足関節などに関節拘縮を起こしていることが多く、ホイスト（転倒予防装置）などの介助で立位姿勢を保持し、下肢に荷重して足圧をかけようとしても必要な足圧がかからず、HALが適切に動作しないからである。

2020年にさらに小型モデルのHAL自立支援用下肢タイプに2Sサイズがラインナップされた。この2Sサイズは福祉用具であるが、通常の理学療法の中で使用可能である。小児期に関節拘縮が起こる前の歩行可能な時期にHALを開始することが可能となった。

小児期に実施するHALでは脊髄性筋萎縮症（SMA）などで疾患修飾薬による薬物療法（ヌシネルセンやリスジプラム）と合わせた効果が観察されている。デュシェンヌ型筋ジストロフィーにも小児期からHALと薬剤（ビルデプソ）を併用する複合療法を行うことができれば、歩行可能期間を延長し、生命予後と共にQOL向上が期待できると思われる。

キーワード 筋ジストロフィー, HAL, 複合療法

国立病院機構新潟病院 リハビリテーション科 [†]理学療法士
著者連絡先：高橋 修 国立病院機構新潟病院 リハビリテーション科 〒945-8585 新潟県柏崎市赤坂町3-52
e-mail: takahashi.osamu.uz@mail.hosp.go.jp
(2024年3月29日受付 2024年6月14日受理)
Current Trends and Future Directions in Rehabilitation
Osamu Takahashi, NHO Niigata National Hospital
(Received Mar. 29, 2024, Accepted Jun. 14, 2024)
Key Words: muscular dystrophy, HAL, combined therapy